

## 天文にとりくむ青春を、ノベルで

### あこがれの天文クラブ

私事ですが、小学年の時から宇宙や天文は好きでした。親が、望遠鏡を持っていて使う機会があり、自宅で土星の環だのリング星雲だのをに入れて見たりしていました。しかし、それ以上の活動はなかなかできません。近くに科学館がなく、友の会のような組織もなく、天文にとりくむ友達もいなかったからです。

でも、図鑑や子供向けの本の天体写真や、天文への取り組みの記事を見ては憧れていました。天文クラブに入りたいなあと思っていたのです。そしてそれがかなったのは高校生の地学部に入ってからでした。部活動で山に合宿に行き、先輩の指導で天の川の写真が撮影できたときは心底嬉しかったことを覚えています。なにより仲間と星の話ができるのが楽しくてしょうがありませんでした。

でも、本当のことをいうと、クラブに入るのには怖じ気づいていました。いったい誰がいるのか、どういう活動をするのか周囲に経験者もなく、イメージできなかったからです。

### 天文にとりくむ青春をノベルで

何かを体験できないとき、本が役立ちます。私の子供の頃には、天体写真家の藤井旭さんが、福島に星の別荘「白河天体観測所」を持ち、天体観測だけでなく鍋をついたりして楽しんでいるのを読んで、大人はいいなあと思っていましたが、中学生や高校生のクラブ活動について描かれたものは見当たりませんでした。インターネットもまだなく、天文雑誌の投稿や会報紹介のページでわずかに知るだけだったのです。

ところが、最近、天文にとりくむ高校生の青春を描いたノベルが、次々に発売されています。読んで見ると、作者の実体験や、取材に基づき描かれているようで、フィクションといいながらかなりリアルな感じです。気軽に読めますし、なかなかいい感じなのでみなさんにもご紹介しようと思います。わずか3年間しかない高校生活を再体験する気分になり楽しいですよ。

### 遊歩新夢「星になりたかった君と」 実業之日本社

亡き祖父が残した私設の天文台を使う高校生が、同学年の少女と出会って、祖父のそして自分の夢である新天体の発見に共に取り組んでいくというお話です。機材が最初からあり、アマチュア天文家の祖父の人脈という財産はあるうえで、少女との交流の中で力を発揮し、多くの人々の協力を巻き込んで、その情熱が結実していく様子が活写されています。



なお、舞台は関西で、フィクションとしてですが、大阪市立科学館も登場します。作者の遊歩新夢さんは科学館の常連だった人で、いまま続ける天文趣味の経験や人とのつながりの体験がこのノベルに結実しているようです。なお、このノベルは単発テレビドラマとして放送されました。



### 天川栄人「セントエルモの光」 講談社

副題は「久閑野高校天文部の、春と夏」です。続編「アンドロメダの涙」は秋と冬になっており、これは前編です。

舞台は「まわりが干拓地の平坦な場所」の「田舎」の高校の天文部で、県の北には高原があるというところ。主人公は特段天文に興味はなかったけれど、東京から郷里に戻ってきてところ、高校の潰れかけの天文部にて、ほぼ一人で熱心に活動している先輩と出会い、さらに仲間を広げて天文部の活動が展開していくという内容です。

「北斗七星って結構大きい」とか「微動を使う」とか、経験者じゃないと書けない表現が多くでてきます。で、後書きに「KUALA」で天文の楽しみを知ったとあります。そして、作者が京大出身であることから、飯山学芸員も所属していたインカレサークル京都大学天文同好会のことで間違いのないのだそうです。つながればおもしろいですね。

### 辻村深月「この夏の星を見る」 KADOKAWA

2020年春。コロナ禍で活動が停止になった高校のクラブ活動。コンクールや大会は全て中止になり、クラブどころか、登校も許されず、同級生とすら会えない。そんな状況から、茨城、渋谷、五島列島の高校生（一部中学生）が理科、天文部や公開天文台の大人のサポートを受けつつ、自分たちの意思でつながり、交流し一緒にクラブ活動していく、コロナ禍での天文クラブの青春を描いた小説です。

東京新聞に連載された新聞小説がまとめられたもので500ページに近い大冊ですが「ツナグ」や「ハケンアニメ！」などのヒット作で知られる辻村さんが、その見事な筆致でスルスルと読める内容となっています。内容も、高校の天文部を取材し「スターキャッチコンテスト」や「空気望遠鏡の製作」といった実際に行われている活動をベースに、活写しています。



渡部 義弥(科学館学芸員)